

電腦千句第九 賦白何百韻

二〇一九年二月一日から二〇二〇年五月三〇日

於 さいばあすぺいす

雪吊や六義（むくさ）の苑の滯つくし

如月

春立ちぬれどなほ年の内

樂歳

曳かれゆく車はかろき音をもちて

梢風

うたあはせとて身なり整へ

蘭舎

畳なはる山を清めし初あらし

羽衣

険しき徑に谷紅葉追ふ

夢梯

雲晴れて月をしるべに頼りたき

遊香

ほとほとと戸を叩く旅人

朝姫

書きぶりの美しき真名手習へる

千草

いと賢しげに結ぶ口元

月

陽は西に扇をかざす夏衣

歳

銘をつけよとたまはりし鉢

風

よろこぶもなげくもいつか時すぎて

舎

松の千歳をよぎる花びら

衣

入り江より眺むる富士の薄霞

舎

暦めぐりて新しき春

香

触れ待ちて心なきたる振りもせで

姫

惜しくもあらぬ文殻の藪

草

おとをひし庵の主の臈長けて

月

そのもてなしのまつむしのこゑ

歳

ゆくりなく風にすすきの渦生(あ)れぬ

風

平らな原に月のいざよひ

舎

戦慄きてあづま路くだる都びと

衣

蛇（へみ）の出づるや於爾の現るゝや

梯

岩かげに打ち捨てられし鈴ひとつ

香

ひなの里みにかざら橋揺れ

姫

山の音ふと止み髪のかぐはしき

草

時雨の先に根の国の坂

月

楯の火に語部もまたゆらぎけり

歳

あやかしの子はあやかしとなる

風

携へしふくべをみたす甘き酒

舎

夢見心地のとりとりと

衣

若草の薫るいのちに枕して

梯

はや遠のきし雉子鳴く声

香

逢ひがたき君の面影おぼろ月

姫

佐保姫を描く筆の絵すがた

草

二ウ

田の神の坐（ましま）す水辺幣きよく

笛に太鼓に歌ぞながるる

ねんごろなまうけ調ふおん館

雲のはたてに何ながむらむ

花かつみ旅の翁の道連れは

笈に檜の笠杖に矢立も

重き荷を背負ひて馬のつぶやかず

風に尋ぬる天地の声

月うけて忘扇は文殿に

長き学びの夫に秋寂ぶ

大宮に霧たちこむる司召

いつか定め船に乗らばや

きのふよりけふみる花の色ふかし

小さきおよびの光の弥生野

月 歳 風 舎 衣 梯 香 姫 草 月 歳 風 舎 衣

三才

さわらびのかさねもうれし乙女らに

様

さへづりのごと撥ねし笑み声

香

窓の外は樋つたふ雨のしきりなる

姫

昔戦のありし川の名

草

侘助のうつむき咲ける御寺内

月

僧登り来る坂の底冷え

歳

読まぬまま文を返すもくちをしく

風

まつやと告げよ秋のはつ風

舎

鏡なす月に今宵のうす化粧

衣

過ぐる車に袖の露おく

梯

誰しもが煙と消ゆる鳥辺山

歳

あへなきものと知れば愛しき

姫

あると見るうつつも夢のうちとこそ

草

はつかに明し春雨の朝

月

時くれば老木も花をひらかせて

笑ひのどかな雛の遊びに

はるかなるいくのの道に東風吹かば

鳴神となる大臣祀られ

とどろきにあらがふ身こそもののふと

諫むる顔の輝やかまほし

巻紙に戯るる猫嗜めて

ひるがへしゆく墨染の袖

走り根のみち鞍馬より貴船へと

鳩ふく声のいづこともなく

この山の深さを知らぬ昼の月

黒塚らしき影のすさまじ

なにゆゑに若き血肉を欲りたまふ

召されし君はつひに帰らず

歳

風

舎

衣

梯

香

姫

草

月

歳

風

舎

衣

梯

つつがなく友と相みて語りたき

香

せんじ物とて苦し苦しと

姫

久寿玉の柱をたのむ起き臥しに

草

夕星（づつ）触るるかはほりの舞

月

この島は南の海の果てにして

歳

すぎさりし日のよみがへる筈

風

うつくしき笛に誘はれ歩み出づ

舎

律（りち）の調べを片待ちの松

衣

寝ね難き秋の百夜を過ぎしける

梯

月も常より近く見えしを

香

山裾の菊のかきりのただよひて

姫

誰そ醸せるや大甕の酒

草

あまびふとふ絵札貼られし厨口

月

嵐の宵に木戸軋む音

歳

四ウ

ほいとうの提げたる鉢のおほいさよ

ただひたすらに法のためにぞ

玉鬘見えざる糸に導かれ

やがて微かに光射しくる

巣ごもりを終へし翼の軽やかさ

陽のあたたかく歩む芝原

かへりくる春ごと花のあらたしき

謡（うた）にかしづく鼓うららか

風

舎

衣

梯

香

姫

草

月